
フィッリデの花葬

市子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィツリデの花葬

【Nコード】

N5329A

【作者名】

市子

【あらすじ】

少年は闇に囚われていた。少年は孤独だった。少年には何もなかった。一人の少年が世界を生きる話。

彼は知る、神が思想ではないことを（前書き）

初めて連載を書きます。筆まめではありませんが、よかつたら最後までお付き合い願います。

彼は知る、神が思想ではないことを

鋭利な爪が静かに首筋をなぞる。酷く冷たいそれはゆっくりと、けれども確実に皮膚に刺さるように触られる。

僕は抵抗しようと身をよじるが、同時に皮膚にそれが深く刺さり思わず声にならないうめきを上げた。食い込ませるかのように、それは僕の中へ侵入を始める。

血が、血が僕を溶かすのだ。まるで四肢が自分のものではないように感じる。

「嗚呼、愛しい子。愛してるよ、」

血がどくり、どくりと下へ伝う。生温かいそれはゆっくりと僕を染めてゆく。僕の意味なんて何もない。ただ流れる無機質が僕から全てを奪うような気がして今更ながらに体が震え始める。

死ぬのだろうか、ここで。まさかそんなはずはあるまい、こんな、こんなところで？

「怖いことなんて一つもない。私たちは永遠であり、常に悲しみに存在するものとして生を受けたのだ。全うな存在から逸脱してゆく愚鈍に、想像力に、生について考える己に傷つけばいい」

おまえは、愛してるよから殺してはやらないよ。

体に力を入れる。爪先から足の先までの巡りが停止したように動かなかった。首筋が、熱い。

「嗚呼、私の愛しい子フィッリデ」

噛みつくように、つめたい、つめたい爪が僕をひつかいた。僕をひつかいた。

輝くものが告げた神様の死

「王が、王が崩御なされたぞ！」

街は賑わっていた。市場は相変わらずの人々で混んでいる。

人を掻き分けながらフィツリデは歩く。彼は小さい。まだあどけない顔、大きな漆黒の瞳、白い肌、上気した頬は微かに赤く染まっている。

肩まで伸びた黒髪を適当に一つに結った姿はまるで少女のようだった。

まだ声変わりもしていないので、当然声だって高い。

しつとりと湿ってきた首もとを軽く拭う。長い髪のお陰でそこだけ妙に熱い。

こんなに暑いのは久しぶりだ、フィツリデはそう思った。

（王が、死んだからな）

世界は7人の王が統べている。政治も政策も天気も何もかもを。しかし、つい先日王の一人が崩御なされたために天気は総崩れで寒暖の差が激しく日照りも続く地方が増えた。王は天気を統べていただが、王が崩御されたことを知らない街もある。ここが良い例だ。都城から離れれば離れるほど伝わるのは遅い。文化の発達の差、それが顕著に表れている。

「おい、王が崩御なされたぞ！」

農夫の叫びが頭に響く。

嗚呼、喉が乾いた。なにしろ朝から何も口にしていない。

フィツリデはちいさく、周りに聞こえない程の小さな声で唱える。

「我、水を求むなり。力を、天に響く雷鳴と共に豪雨となれ。我の血肉となり世界に与えろ」

その瞬間、一筋の光が落ちる。轟き、雷鳴が聞こえ始める。それと同時に徐々に水滴が世界に落ちる。

皮膚がうずく。渴れた天気はあの時を思い出す。早く世界が潤えばいいのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5329a/>

フィッリデの花葬

2010年10月25日01時32分発行